

壁代上事

凡四方ナ五尺屏風之上高ニ

南面紐前之津者女口ヲ爲西、東西同前ヲ爲北北面南定東西北面是三方立廻五尺屏風南面之

御簾ナ四尺几帳之高ニ上天ニ其下ニ同几帳ナ立渡

〔安齋隨筆後編十一〕一壁代は、白綾の立幅也、兩面也、上下に袋乳ありて、檜卷木とて、鎗の柄のごと

くなる檜の卷木を入れる也、紐あり、紫の平グケ紐也、御帳の紐と同じ、蝶鳥をゴフンにて畫く、又は

白糸にて縫にもする也、

此卷やう、翠簾へ添へて巻き、又別に巻く等習ひあり、鉤にもカクルなり、上は長押へ〇如此

ヒルカギにて懸くるなり、大凡長ケは九尺程、廣サは間に従ふなり、

〔古今要覽稿器財〕かへまろのちやうかへまろ

或説云、壁代は總體白き平絹を用ゆ、但あはせ縫なり、おなじく裏は紫羽二重にて縫、紐は表うら

ともに同じ所に縫付るなり、胡粉にて蝶鳥の形を畫きて、綴糸は練ぬきのより糸を以てぬふ、長

さ七尺三寸、幅一尺一寸、仕立あげのつもりなり、但一流の分なり、おのゝ鯨尺を用ゆ、

按に、此説信じがたし、長七尺三寸といふは鯨尺也といへば、曲尺にて九尺一寸二分五厘にあ

たる、類聚雜要抄に九尺八寸といふとあはず、また主殿寮雜話に一丈といふともあはず、また

幅一尺一寸といふもいかゞ、古書には六幅または七幅といひて、廣さを尺にてははからず、疑

らくは後人推量していへるならん、

壁代用法

〔儀式二〕踐祚大嘗祭儀

黒酒殿者、構以黒木葺、葺用萱、薦爲壁代、白酒殿者、構以白木、自餘同黒木殿、

〔延喜式四〕伊勢大神宮太神宮裝束略中 壁代絹帳二條一條長六丈、廣六幅、一條長九尺、廣二幅、